

露頭の風景 写真家の視点

斉藤 麻子

南神戸から電車でおおよそ40分ほどの押部谷駅と緑が丘駅のちょうど中間あたりにある露頭です。長い年月を経た枕木のような色をしている為か、露頭に年季という言葉もおかしいのですが、まさに年季の入った骨董品のように見えました。露頭を撮り始めるようになってから、地質的な時間尺度と生物的な時間尺度があまりにも桁違いなので、混乱することが多々あるのですが、時間の多様性について思いを馳せるきっかけになることも、露頭のもつ魅力の一つだと思います。電車の過ぎ去るスピードもカメラが切るシャッタースピードも、私を感じるスピードとは違った捉

え方があるのでしょうか。また、この露頭は線路と車道を分かちような形で立ち、露頭自体があたかもフェンスや堀の役割を果たしているようにも見えました。このように街の中で露頭を目にする際、露頭と建造物が一体化していたり、歩道に突如として岩が祀られていたり、不思議な光景として目に映ることがよくあります。露頭が地質的な意味合いを含む一方で、町の開発による建設的背景やその土地土地の習俗をも内包し、新たな側面を見せてくれているようです。

地質屋の視点

及川 輝樹

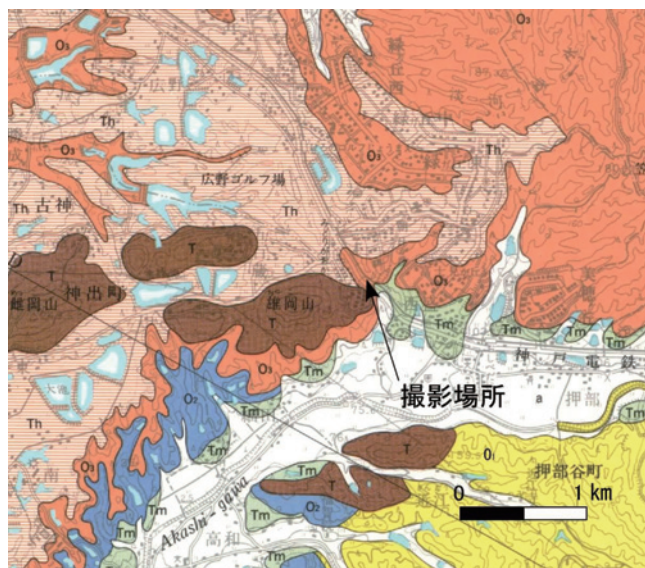
神戸電鉄の電車が走る手前の露頭は、丹波層群を構成する岩石からなります。丹波層群は、中生代のジュラ紀(約2億~1億4000年前)にかけて日本列島に付加した付加体です。同様の付加体は広く関東地方から中国地方にかけて分布しています。これら付加体の分布する地域は丹波-美濃-足尾帯とよばれ、日本列島の歴史を考えるうえで重要かつ主要な地質帯の一つであります。

丹波層群は、近畿地方から中国地方にかけて広く分布していますが、神戸市付近から西はそれより新しい地層に覆

われたり、白亜紀から古第三紀の花崗岩類などの貫入岩体に貫かれたりし、地表ではそれほど広く認められなくなります。写真の露頭のある神戸市西区押部谷町付近は、第四紀の大阪層群などの新しい地層に覆われるため、あまり広く分布していません。しかし、大阪層群のすぐ下には丹波層群が分布しています。まさに、この地域の骨になる地層といえ、撮影者の斉藤さんが感じたように“年季”が入っているとさえいえるでしょう。

文 献

藤田和夫・笠間太郎(1983)神戸地域の地質。地域地質研究報告(5万分の1図幅)、地質調査所、115p.



5万分の1地質図「神戸」(藤田・笠間, 1983)に一部に加筆。Tが丹波層群、Tjtは白亜紀の有馬層群、O₁₋₃は第四紀層の大阪層群、Th~mは大阪層群を覆う段丘構成層。この地域の丹波層群は、有馬層群および大阪層群に広く覆われている。表紙写真の露頭の位置は、丹波層群の分布が狭かったためか、大阪層群として塗られている。